



周 郷 博
服 部 公 一

☆ はじめに

周郷 服部さんていうのは、どういう、どういうったってほくの頭の中にあるタイプしかないわけだけれど……どういふ音楽家なのか、失礼だけれど、仰々しくいえば業績、について知らないんですよ。なんか、さとうよしみの歌の作曲があるんですって？

服部 アイスクリームの歌、なんかそ

うです。

子どもの歌っていうのは……そうですね、別に子どもの歌作るっていうことに使命感をもって作ったわけじゃないんです。作り始めたわけでもないんです。

周郷 そういう言葉、ほく好きなんです……。

服部 やってる内にね、これは割に大事なことなんだなあ、っていう気はしてきましたがね。

周郷 ほくは、子どもの専門やっというのはいやなの。ほくは教育の専門やっというのもいやです。これはもう、教育が商売になっちゃってるんだから。何か自分のために教育を利用してでしよう？ そして口だけうまいことをいってます。やっぱり何かのはずみに、教育とか児童とか幼児とかっていう、専門ではない人がヒョッと気がつく、そこで新しいものが生み出される可能性があるんです。

服部 子どものもの、っていうと、「お子さまランチ」っていう言葉がよくあるんだけど、あれは、料理人が必死になっ作っているランチではないですね。旗なんぞ立てることによってごまかして、トマトケチャップなんかでピンク色にしたりして……。

周郷 そうそう、だましてるわけですよ。

服部 あれはね、誰が見ても簡単に作

れるんです。だから、おれはきれいなお子さまランチでも作ってやろうなんて思う人がいないともかぎらないけれど……

。(笑い)ところが、お子さまランチっていうものが、本当に子どもにとって必要なものなら、それに一生をかけるのもけっこうでしょうけれど、ぼくの考え方からいくとあれ、なくてもいいものでね。

周郷 なくてもいいもんですねー。

服部 カレーライスっていうのはね、あれはやつぱり、今みたいに「カレーライスが、即たべたいな」なんてことじゃ困るけれど、カレーっていうのは、本来南の、暑いところの人が食生活を維持するために考えた、大変命がけの作品でね。あれは本物になりうると思うんで、カレーは追求してもいいけれど、お子さまランチは追求してもしようがないんじゃないか、と思うんですよ。

周郷 今の話は、雑談みただけど、重要なことだな。

教育っていうこと、本当にぼく、教育って考えただけでもいやなの。幼児教育なんかや、つて、ます、なんて……お子さまランチのたぐいだなあ。(笑い) センチメンタルで……。センチメンタルならば、人間だから当然あってもいいんですけれど、そのセンチメンタルが、ちょっと、変なセンチメンタルなの。センチメンタルが善人であるような……。

☆ おやじ

服部 私の原体験みたいな、おかしな話があるんですけれどね。私の両親は私の小さいころに離婚しちゃったんです。そしてぼくは祖父母のところに移住されたんですが、ある時うちのおやじが後妻をもらいまして、ぼくを引き取ったわけ

です。そしたらその後妻さんが病気になるっちゃって、結局は死んだんですが、その時に病気のせいとか、彼女はヒステリーみたいになっちゃったんです。そして、ぼくのことを、何だか頭にくるんでね。

周郷 ああ、ヒステリーになったからね。

服部 それで、はさみで、着てる洋服の上から下まで全部切られちゃったりしてね。何であんなことしたのか……ぼくが五歳の時です。

その時にね、おやじがぼくのことを抱いて、ま、危いから逃げるわけです。それで毛布にくるまれて、おやじが抱いて逃げてくれた、それが、私の一番最初ぐらいの思い出なんです、おやじの。おやじっていうのはそれから以後、何もしてくれなかったんですけれどね。ぼくのおやじ、この間、二月に死んだんですけれど、ぼくの四十何年の生涯の内、おやじと一

緒に暮したのはのべにして一年もないんですが、その中のある一日っていうか一晩っていうのがそれなんです。

それが何か、おやじっていうものもっている意義、というか、おやじというものが息子に対してもつ、つまり外敵から息子を守る、ということ、なるほどおやじっていうのはこういうものなんだな、と思ったことがぼくの一生を支配していくような気がしましたね。

しかし、考えてみるとね、おやじもその時は本気だったような気がするんです。

周郷 そうですね、そりゃわかります。

服部 ものすごく本気だったと思うんです。三十ぐらいですよ、三十二、三です。そしてどうしようもなく、ぼくの目の前でその女の人をはり倒したんです。

結局ぼくは、このことだけで一生おや

じを評価していくんだと思います。

後年そのおやじが大変な恋愛をいたしましてね、ぼくが十六、七のころです。

うちのおやじは上野の美術学校を出まして彫刻家だったんですがね、その時は、さっきの話の人が死んで三番目の奥さんをもらったわけです。先生と同じぐらいかな、先生明治四十年ですか？

周郷 四十年です、じゃあ、ぼくが高にいたころ、上野にいたわけだなあ。

服部 ぼくはその三番目の人っていうのは、おやじの奥さんだということはおうわかっていましたが、あまりいかさないなあと思ってきました。一緒にいかなかったせいもあって……。

周郷 ああそう、一緒にいなかったのね。

服部 戦争中でしたし、二度目の奥さんが死んじゃってからは、祖父もぼくをおやじのところへ帰そうなんて思わな

かったんです。

ところがある日ぼくが東京へ出てきたら、おやじが家にいないんです。それで奥さんつまり三番目の奥さんに頼まれて、当時おやじは彫刻家じゃ食べられないもんで共立女子大につとめてたんですが、その、共立講堂の前で、ぼくはおやじをまてたわけです。山形中学の三年でしたよ。正月で寒いのに立ってまてたんです。そしたらおやじがきまして、ぼくも一応、おやじを責めたんです。ぼくがあんまりがなんいうもんでおやじも困って、何だか一〇〇円ぐらい金くれましたってね、その辺行って何か食ってまた昼ごろ出直して来っていうんですよ。ところがね、大変なんですよ、朝八時ごろめし食いに行くっていうのは……。駿河台の方まで行きましたね、明治大学の横町あたりでめし食って、四時間ぐらいつぶしてから行きました。

結論から先にいうとね。彼は夕方、彼のかくれ家へ連れて行っただけです。もしたらそこに女の人がいるんです。ぼく、不思議なんだけど、すっかりその人が気に入っちゃってね。とうとう本当のことを三番目の人にはいいませんでした。

しかしその辺おやじも老獪かでね、ぼくは音楽少年でしたから、次の日、日本で終戦後初めてオペラがあったんです。藤原歌劇団がやった「ドン・ジョバンニ」です。その切符かなんか買ってくれて……。

周郷 お父さんが？

服部 えー。それで、行こうって行って、行ったら「おれは用事ができたから先に帰る」っていっておやじの恋人と二人で行かされちゃったんです。

周郷 ああそう、おもしろいね。

服部 それからいろんなことがあって

ぼくは山形へ帰っちゃってそれきり東京へ出て来なかったんです。ぼくはその時、おやじのことをそれほど許してもいなかったけれど、何か、あの女の人の方がいいような気がしたんです。おやじは結局その人とは結婚しませんでした、そのころ、その女の人が二十六、七、おやじは四十ちよつとでした。

あれは、ちよつとよかつたと思いますね。何か、甘ずっぱいような気持ちで、おやじの恋人とデートなんかして……。

周郷 ヒステリーになった人よりその人の方が……魅力感じたと思うな。十六、七だったらそうだと思います。

服部 それともう一つは、私の本当の母の問題じゃないからでしょうね。

周郷 そうそう、たしかにそうだ。公平に見られるわけだ。

服部 もっともそれでぼくは大分損をしましたがね。ぼくがおやじの愛人の側

についたということ……。家庭的には、

周郷 時代が時代だしね。

服部 だから、女と男っていうのは、ある意味ではすごい戦いで、緊張をゆるめて「私がかみさんでござい」なんていっていると、男っていうのはいつでも裏切るもんですね。

周郷 そうだと思ふよ。

服部 しかし、非常におかしいと思うのは、おやじがしたと同じようなことをぼくがしてるのね、今。

周郷 そりゃあ、文学作品なんかのテーマにも見られるように、なんとなく、気がついてみると同じようなことやってるっていうのはよくありますよ。しかし、全然おんなじ、というんじゃないんだな。

服部 ただその時私がおやじについて思ってたのはね。「こんなくらしをする

人が、どうして子どもなんかを作ったんだらう」ということです。

周郷 それは十六、七の時？

服部 ええ。

周郷 ぼくもね。ぼくは実におとなしい子どもだったって、もうなくなりましたけれど小学校の時の先生がいいましたけどね。やっぱり十六、七のころはそういうことを考えましたね。父親と母親は何のために、能もないのにこんな結婚なんかして……と思ったよ。

服部 それで、親の因果が子に報い……みたいなので、ぼくが子どもを作らないのは、そういうことですね。子どもは非常に好きなんですけれどね。やっぱりそういうかげとか、刻印とか、それはかなりおやじたちの生活がぼくに押ししてくれたような気がします。だから先生がおっしゃったように、親と同じようなことをしても、全く同じじゃ

あないんです。形としては同じなんですけれど、実質は違うんです。

周郷 今、男と女、恋愛と結婚みたいな話になりましたけれど、今の日本の女の子たちが考えなきゃならないことがいっぱいあるんじゃないの？ 男っていうのは子どもができちゃうと、しょうがないから、いやでも、何か心は離れちゃってるんだけれども、家庭のビジネスだけでつきあってるっていうことが、かなり多いですね。女が何か図にのってるといけないんじゃないかと思うの。

今、服部さんがいったように、やっぱり緊張しているものがあってね、そういう緊張の中で男も女も成長するんだと思います。

服部 ぼくは、この辺から今日の本題に入るといいと思うんだけど……。

周郷 いや、今までのものもなかなかいいよ。(笑)

服部 ほんもの人間のたたずまいみたいなものを見せるということが、教育だっていうことね。

周郷 そう。ぼくは、お父さんが五歳の服部さんを毛布にくるんで、守って、病気の奥さんをぶんなぐった、そういうことが、服部さんが今こうして、この年齢で、単に父親像だけではなく、人生っていうものをごまかしく見ようとしてる……もともになったんじゃないかな。

ぼくは服部さんのことをあまりよく知ってる、理解してるところは少ないんですけど、この前お目にかかった時なんかも、本当に何かこう、作曲家とか音楽家とかいうのは、裏表なんか使いわけることができませんからね、一般にそうかもしれませんけれど、かくしごとがない、一人の人間として全部を出している人だと思いました。日本人がしばしばやるように、ちょっとよく見せようなんて

ことが全然ないでしょ？

服部 いや、そりゃあ、ちょっと……

(笑い)

周郷 全然ない、といっちゃってしまっちゃちょっとほめすぎちゃってるけど……

服部 ぼくが、先生の今おっしゃったことに付言すればね。おやじがぼくを守ってくれた原体験と、おやじが自分の恥部みたいなものを自分の恋愛ということとでぼくにさらけ出したというその二つ、片方はイエスの姿であり、片方はノーの姿であるわけです。そのイエスの姿とノーの姿で、はだかを皆ぼくに見せてくれたということが、ぼくにとってもかなり意味があった、ということがいいと思います。

周郷 もうちょっとつけ加えるかね。それから、常套的な言葉になるけれども、人間の真実の姿、緊張してる状態でしょ？ どっちも。恥部を見せてるって

いってもいい加減じゃない、そこがぼくはよかったと思うんです。

服部 恥部っていつても、ぼくが一番いやだと思うのは、女がよくいう、「男ってみんなこんなものよ」とか……。

周郷 観念的なんだなあ。

服部 そう、観念的に、安い観念論みたくて、子どもってというのは、本当のところを親に見せられるとガクッとくるんです。

周郷 またぼく、余計なことをいいそうだけど、本当のものっていうのはね、今の「男ってこんなものよ」なんて、そういう観念的な言葉ではないえなものです。それを、小さい時に体験しているかどうかですね。

☆ school

服部 今日は、芸術の話をするのを

期待していらっしやるようだけど、ちょっと変な方にそれちゃいましたね。

周郷 その中で、特別に芸術の話をしなくても芸術の話にはなるんですよ。

服部 あのね。「アンチコロ」っていうのは、ぼくは人間の生活の中には、絶対ないと思います。ハンドブックっていうのはないんです。

だから、「お母さんらしくしましょう」「あなたは人の親じゃないですか」「教育者じゃないですか」とかっていうようなことより結果としておやじであり、結果として奥さんであり、結果として先生であるのであって、その前に一人の女であり男であり、(まあ社会的存在という意味も含めてですよ)そういうもので本気で生きている存在であるということが、何よりも子どもにとって一番いい教育である、ということですよ。

scholia っていうのは、ある時に誰か、

scholar 的なことを始めたやつが悪いのであつて scholar なんているのがない、もつと前から教育はあるわけでしょ？

周郷 学校っていうものね。ゆとりという意味のラテン語ですよ、本来は。

服部 その scholar が school になっちゃったわけですけど……、ところが school っていう言葉にもう一つ category に近い意味もあるんです。グループとか派とかやり方とか……。今の学校は、どっちかというとなんとか派っていう意味で使っちゃってるな。

周郷 そうですね、派ですよ。策略の徒党です。

服部 あれはちょっとがっかりです。もつとゆとりがあつて、philosopher ではなくちゃいけないと思うんだけど……。

周郷 そうです。今メキシコにいるイワン・イリーチなんかでも、"学校のいい社会" っていう本があるのは、やっぱり

り学校っていうのは school という意味で、どの徒党に属するか、結局、企業家とか政治家とか、ロシヤでいえば、ロシヤの政治上の指導者の手段にしか使われなわけです。

服部 そうですね。学校っていうのはあれ、科学でもなければ、philosophy でもなければ何でもないんですよ。何かっていうと政治です。

周郷 イリーチもいってます。病院、教会、学校、この三つが彼の頭の中にあるわけです。教会っていうのは何か、scholar 党派になつて居るでしょ？ そして神はいなくなっちゃいました。病院でいうのは何か、医者の方派になつちゃったな。そして philosophy がないわけです。病院は病気を作つて居るところであつて、治すところじゃない。学校っていうのもそれと同じような場所で、神さまはいない学校なんです。

☆ 真実

服部 ちょっと話を前にもどしますと、たとえ、"お父さんとお母さんが夫婦げんかをしました。本当にいやらしいと思います" "してはいけない" あるいはそういう姿を見せちゃいけないんだ、という必要もないと思うんです。

周郷 そりゃないね、そりゃやっぱり真実だものね

服部 そりゃ、その子たちも大きくなればやるんですよ。そこに愛情があつて、緊張感があれば、けんかも、セックスでさえも肯定されると思う。

だから、教育の中でも、"教育" ということよりも、自分が自分の仕事を通じて社会的にバッチリ生きようというふうな人間がやることであれば、よしんば少し失敗があつても大抵通る、技術偏重みたいになつて、how to teach なんている

ことに一生懸命になるとだめなんです。ところが、ほくみたいなことをいうと精神主義っていうんですよ。そしてだめだっていうんです。

周郷 精神主義っていう、変ないやらしい言葉でいったんじゃだめなんです。

服部 しかし音楽の教師に聞いているならば、自分がいい音楽をやろう、あるいは、自分が子どもたちと一緒にいい音楽を創り出そうとしている先生は、教える方、上手ですよ。

周郷 そりゃそうでしょうね。

服部 自分で発明し、あるいはどこかへ行って覚えてき、教育技術 how to はちゃんとどこかでもってはいらんです。口先三寸で how to だけやろうと思ってもだめなんで、むしろ、もう一つ一番いけないことは、幼児に音楽を教えてやろう"なんて、とんでもない、うぬぼれもいいとこですね。ここの場において自分

に与えられたオーケストラ、あるいは合唱団なりは、子どもたち十五人である。そしてほくは彼らと同じ次元の音楽家である、ここでの子たちと一緒に一番た

のしく音楽をやるには、ここで音楽を創りあげるのはどうすることかかっていうところが一番大事なことであって、それはその場における significance (重要性) なんです。その significance は how to teach なんていうことをこえてるわけなんだな。

周郷 でもまあ戦後、how to というのはね、幼稚園の教育とか小学校の教育の中で、ばかにはやっちゃった、だけじゃなくて、何かみんな毎日の生活もどうもみたいじゃない？

服部 そうですね。

周郷 その、もとなっていているのは何か、衰弱しちゃった感じですね。だから、学校制度なんかだって how to ですよ

政治家の how to かもしれないの。こうやっておけば選挙に都合がいい、日教組だっけこうやっておけば日教組は安泰、ということになると思うの。

☆ 夫婦・男と女

周郷 時間も大分たってきましたからちょっといい残したことをいいます。

この服部さんの本の終りの方読んでましたらね、幼児教育のことが出てますね。"歌いたがりの心万才!" というところに、

"就学年齢を二年下げるとか、幼児学校義務制、義務教育化するとか、いろいろな方策はたしかにあるだろうけれども、レッスンママみたいな狭い型ではなしに、おおらかな雑唱、失礼、合唱の歌声の中にそれを求めるのも効果的な方法だと思ふのだが……"

とこれ最後なんです。やっぱり何か、

「合唱」といつても何もみんなが同じ声で歌わなくても、個性的に違うものがあるんだけれども、そういうものが、今の教育の世界にはないですね。何か school 党派に忠実なりやいいんですね。制度までそうなんです。しかしそうじゃなくて、ここでいま、合唱といつてるものは、それを一生懸命やろうとしたら、教育はそこから生き返ってくるような気がしますよ。

服部 だからその、よく型にはめる教育がいけないっていいですね。型にはめる教育はいけないといってる先生が、教室で何をしてるかって、やっぱりしらずしらずに自分の知ってるもののなかに、子どもをとりこもうとしてるんでね。だから、いろいろそういう意味で、もっと自分が生きるといふこと、自分が楽しむといふことに本気であってほしいですね、先生たちは。ところが自分で楽しむ

つていうと「じゃあ、私は今恋愛をします」「ボーリングをしています」つていてそっちの方ばかり一生懸命になって学校へ行くのやめるつていう、これは違うんです。

周郷 今の服部さんのいったことはね日本人はね、生きることを楽しむ、楽しみ方を知らないんです。だから楽しむつていうと変な方へ行っちゃうのね。

服部 そうなんですな。

周郷 それもまた school になっちゃうんだ。

服部 school っていうのは、考えてみると、どうも日本の場合は、さっき先生のおっしゃった徒党みたいな派閥が多くてね。一つの school の中にいくつもの school があつたりして……。派閥つていふのは人脈という意味を含めてもいいんだけど、ぼくが今いつてるのは、教え方とか、そういう見のせまいことをいつ

てるんです。

周郷 しかもその派閥というんだつて、ヨーロッパなら、デカルトとか、偉い人がいますね。そういう、派閥とは違うんです。何か、移り気の、今何がはやつてるかとか、今誰が権力者であるかとか、つまり、親分子分の関係しか日本にはないような気がするの。

この間も、司馬遼太郎さんがテレビでいつてましたが、「友情」つていう言葉も、ヨーロッパから入ってきたつていうんです。

服部 そうでしようね。

周郷 もともと日本にはなかったんだそう。親分、子分か、徒党しかなかったんです。「愛」という言葉も、ヨーロッパから、中国から入ってきたんです。服部さんのさっきのお父さんの話ね、やっぱりお父さんと子どもただけれど、やっぱり「友情」イエスさまのいつ

てるような意味での「友情」というものに近いものを感じてるわけです。人間が生きてるといふ真実さ、ね。

服部 ただ先生、私の場合は、おやじと一緒にくらしでなかつたから……お互いに客観的で、距離があつたんです。

周郷 だけどね、服部さんの告白的な話、大変おもしろかつたけれどね。今のお父さんが、五歳の子どもに、それだけ一生に、原体験を与えているかっていうとね。あなたは別れちゃっているのに、あなたのお父さんはあなたに生涯的な重要なものを与えたんじゃない？

服部 それは偶然、彼がいい加減な生活をしてたからじゃないですか？(笑)

周郷 今はね、父親っていうのは、毎日いるしね。

服部 ちゃんとしすぎてるんですよ。

周郷 ちゃんとしすぎておもしろくないよ。スケールは小さいし、毎日ちゃん

と帰ってきて、テレビ見ても、しょうがないね。

服部 一つの戯画的な姿を申し上げます。

あるところに、五歳ぐらいの子どもとお父さんがいるとします。その夫婦がある時猛烈なけんかをするわけ、で、はり倒しあつたりして、あげくの果ては、しようことなしに家に帰ってはきてても口もきかない。すると物すごい tension 緊張の中に子どもはおかれてるわけです。きつと身のおき場に困り、生命の危険さを感じると思う。それが、何日かたつて、夫婦が仲直りして、次の日は表情も違つちやつて夫婦が子どもの前に現われる。すると子どもは、またまたびっくりすると思う。こんなことが……昨日まで敵対視していた二人がこんなに仲よくなる、それだけの situation の中で、子どもたちはずい分勉強すると思えます。これは全くぼくの作り話ですけれど……。

周郷 勉強するしね、今の話きいてて思い出したんだけど、うちの近所にかばかりしてる夫婦があるんです。ところがその家の子ども、わりによい子なの。ただすーっと仲がいいなんていうところの子はだめなの。

夫婦でも「友情」という姿で親しくできるといふんじゃないかな。友情っていうのはこわれないんですよ、安心なんです。

服部 友情はあきないんです。だから男と女の間でも友情とセックスのかね合いが必要なんだと思えます。セックスの関係だけで安心だなどと思うのは危険なことです。

だから、教育みたいなものもそうで、「この子どもたちはぼくの弟子だ」と思つて、「私の自由自在になる」と思つて、途端に離れちゃいます。

周郷 それはもう、今のお母さんたちによいことですよ。

ぼくは、今の日本のお母さんたちの *psychology* っていうの、どういふふうに考えたらしいのかなあって思います。マイホームに入っちゃったというせいもありますけどね。昔ぼくはおやじの生まれた家なんかへ行って、嫁で今はばあさんになっちゃった人がいて、子ども心にもお嫁つとめて大変だなんて思いましたけど、今では実にいいばあさんになってますよ。やっぱり女っていうのはね、嫁つとめみたいなのが必要ですよ。ヨーロッパだってそういう修行はあるんですよ。日本の人は、何の抵抗もなしに勤め人の男の人と一緒にあって、幸福になるうなんて思ってる、これは間違ってるんじゃないかと思えます。嫁つとめていうものを、変な姿で肯定するわけじゃないんだけど、なんか修行ですよ。男は社会の中で、いやおうなしに修行させられていくんですからね。

服部 そうです。ところがね、女の職業はちょっと違うんですね。男っていうのは、牡^{オス}として生きると同時に、ホモ・サピエンスとして生きるということを、もうワン・チャンネルもたなきやならないように運命づけられてますね。しかし女っていうのは、牝^{メス}として生きるのと同じ次元で、一つのチャンネルに職業も一緒にのせちゃおうというんです。

だから、一番いやなのは、ピアノを教えたり技術を教える場合、かなりしぼるわけです。しぼる、いふなれば急激に刺激を与えるわけです。この場合、男は耐えるんです。ある程度（今の男の子はしりませんよ）。女の子は、だめですね。つまり、ある時は、ほめられると媚態^{メイタイ}を示し、おこられるとセンチメンタルな態度を示すんです。

周郷 ぼくも、女の大学にいて、たしかにそれは感じました。女が牝^{メス}として行

動することが多くなりましたね。戦前にはあまりなかったことです。学生運動なんかでもありますよ。"女だから通る"とか……。

服部 たしかにそうです。だから、幼稚園なんていうのは一番危ない職場です。あれは女の城ですから……。

だから、もう少しきびしくっていか、女であるということから女自身が距離をもたないとだめです。

もっと暴言になりますが、ぼくは、幼稚園の先生にもっと高い給料を出すようにして、うんともうかる職場にするんです、かりに。すると男が先生になりますね。そうすると今度は本物の女の先生ができるんじゃないかと思う。

周郷 ぼくも幼稚園の園長をして、本当に、どうしても男が必要だと思いましたがね。子ども女にあきちゃうんです。ぼくでも男だもんだから……。

服部 よつてくるでしょ？

周郷 イギリスなんかでは、学校を出てから、身体障害者の世話をしたとか、食堂で働いたとか、ある程度の経験がないと幼稚園の先生の養成機関に入れないとかいったふうだね、そういうことをヨーロッパはやってます。ところが日本では、お勉強ばかりしていました。あれじゃだめなの。知識っていうのは男の世界だったんです。学問っていうのは、哲学も、男だけがやってきたものです。だからもっと女の人にふさわしい哲学が必要なんだな。ところがただ男のまねをする、それじゃだめなんですよ。

☆ おわりに・音楽について

服部 やはり今日の話は、音楽のことにはあまりいかなかったみたいですが……。

周郷 いや、なかなか……。

服部 とまあ one generation ちが

う人が二人で話してるんですよ。(笑い) ぼくのおやじと同じ年なんですから……。ぼくがもう一つつけ加えたいことは、うちのおやじ、つまり周郷先生と同じ年でもう死んでしまったおやじが、ぼくに彼の恥部をかくそうとしたかもしれないけれど、見られちゃったわけ。ところが、彼がある女の人を一生懸命愛してしまったり、一生懸命自分の立場を守ろうとしたり、いわばあられもないというか、のびきならない形で生きている人間というのを見せたということの、教育的な意味が、一つ generation 下のぼくにはあるわけです。ところが、教育、大学の教育は知りませんが、幼稚園の教育の場合、いつでも、one generation はなれてるんです。小学生が幼稚園を教えるわけにはいかないですから……。そこを、私は子どもの気持ちがよくわかる

とか、私は子どもと同じように仲よくなれるとか、何ていったってうそにきまつてると思うんです。

それは、大人が大人らしくあること、その人間がその日その日をまっとうに、一生懸命くらしているということ子どもに見せるしか、本質的にはないのでないか。音楽におきかえていうならば、私は音楽を好きだ、音楽を愛してるっていう人しか音楽を教えるはいけないのであって、音楽きらいな人はたくさんいますよ。いたってしょうがないから、そういう人はほかのことを教えたらいいいですね。

周郷 ところが、幼稚園でも小学校でも、音楽のきらいな人が教えますね。きらいって、まるっきりきらいじゃないけれど、音楽を本当に好きでない人が教えるの。

服部 音楽のきらいな人に、好きにな

れっていったって無理でね。音楽きらいでも画が好きっていう人がいるでしょ？
それなら画を教えたらいいんです。E roundなものにはなり得ないから、結局その、好きっていうことは、自分にとって真実ということなんです。自分にとって真実なことしか、やらない方がいいんじゃないですか？

周郷 無理に、心にもなく知ってるっていうのはいけないんだな、好きっていうのと、知ってるっていうのは違うわけですよ。

服部 子どものきらいな人は幼稚園の先生にならない方がいいですよ。それと同時に子どもの心がわかっていとうことは、大体、子どもが好きということと同義語なんです。子どもといてやっつけている人っていうのは……。

周郷 子どもが好きっていう、好きにいろいろあるけれどね。この間堀文字さ

んが家にきてね、ぼくの家の島にチューリップが咲いてたころだったんだけれど、彼女はチューリップのことは何一つわからないの。山の花をきれいだきれいだっていって、ぼくはずい分花の名前を覚えてました。やっぱり、好きっていうことも、花やの店にある花を「きれいだなね」なんていう、そんな好きじゃだめなの。野の花がきれいだな、と思えるような「好き」じゃなきゃだめなの。

服部 私の友だち、音楽家の友だちの中に商人の息子がいるんです。その家には音楽的ふん囲気なんっていうのはこれっぽっちもないんです。私自身の家にはあったんです。祖母は音楽家でしたし、父も音楽を愛してましたし、ぼくは別です。ぼくはなるべくしてなったんです。

それで、音楽なんかやるのは、ばかだばかだといながらそのおやじさんは死んだんですって。ところがそっくりなが

ら何かいうと金を出してくれたんですって。いいかえればそのおやじさんは音楽なんかわからないわけです。でも息子があれが好きならしょうがないというわけです。あの姿の方が本当のような気がします。おやじさん自身はいいとも思わないのに、「音楽はいいもんだ」なんていってもしようがないですよ。

お母さんが、画が好きなのに、となりの子が音楽をやってるから、うちの子にも音楽をやらせなきゃだめかしら、なんていうの「これからは音楽ができません」と「なんていうのはとんでもない間違いです」。

周郷 そりゃあだめです。そういうんじゃないだめです。

服部 そういうことが、ぼくは非常になげやりで、ひょっとしたら教育ということを否定していることになるかもしれませんが、自分が自分自身に忠実に生き

て行くということが、教育者にとっても親にとっても一番大事なことじゃないかと思うんです。

周郷 たしかに子どもは、うそもかくしもない、いいかえれば、恥部を出しても、それが真実であれば……そういう、緊張した、生きてる姿、それが子どもはほしいんじゃないかな。それが今幼児をとりまく世界、家庭にも、まずないんだと思います。

音楽についても、そうでしょ？

☆ 音楽のふたつの要素

服部 音楽っていうのはね、ぼくの考えからいくと、ふた種類しかないです。かきたてる音楽と、しずめる音楽、しかないんです。

周郷 ああ、なるほど！

服部 で、かきたてるわけです。音楽はかかなりエロですからね。そのエロなん

ですけれどね。音楽っていうのは、それだけやってると、おさまらなくなっちゃうんです。一つの音楽の中には *agogo* と *agogo* がなくちゃだめなんです。しずめるっていうのは *agogo* なんです。

周郷 そりゃあ、ぼくなんかも、バッハなんかきいてるとね、ウィルヘルム・ケンプが武蔵野音大のパイプオルガンのひきぞめのとききに行つて、えらく感激したな。これは *agogo* なんだな。

服部 ところがね、バッハなんか *agogo* だけでもないんですよ。ちょっと *agogo* もあるんです。

周郷 そうね、そうはいいい切れませんね。

服部 ベートーベンなんてね、見てると、非常にかきたてるんです。ところが、かきたてている時に、かきたてきれなくなるらしいんだ、時々。それで、彼は精も根もつきはてて、みたいなどころ

もあるんです。そうすると、そこが意外にいいんです。

周郷 モーツァルト、なんかよりもかきたてているところが多いな。

服部 モーツァルトっていうのはね、ある程度、B・G・M的なところがあるんです。あの人は一円、二円で書いた人だから……金がほしくて。

周郷 今の話ね、やっぱり教育の世界にも、その二つはあっていいと思いますね。かきたてるものとしずめるもの、だつて、ぼくなんかにしても、かきたててほしい時がありますよね。気がふさいでる時なんか、音楽によってかきたててほしいですよ。

服部 ところがね、自分で声を作るようにになってから、つくづく思うんですけれどね。かきたてる音楽っていうのは、書けないですね。かきたたないんです。

周郷 むずかしいんだろうね。

服部 不協和音みたいなものを、使えば使うほど、しずまっちゃうの。躍動しなくなっちゃうんです。音が複雑になれなくなるほど、かきたたなくなっちゃうんです。

だから、シェーンベルグなんかの音楽ね、あの十二音技法の、やっぱり、あの人すばらしいなと思うのは、ああいう音の複雑なつながりをもって、すごい *erotic* な音楽が時々あるんです。ほくにあの手法をもって書けといわれたら、絶対エロなんか書けません。そういう意味では、単純である方がエロ、かきたてますね。それから、もうちょっといい方をかえれば、低音の楽器の方がかきたてます。

周郷 ああ、そりゃわかるような気がするな。

服部 フルートみたいな楽器でかきたるといったって、これはちょっとむり

です。チェロとか、テナーサクソフォンとか、ああいう音はかきたてるんです。

周郷 日本の音楽でもそうかもしれないな。笛なんていうのはしずめる方だな。

服部 そうですよ、しずめる方ですよ。絶対に。津軽三味線みたいな方が、はるかにかきたてますよ。

周郷 ああ、あれはかきたてますよ。あれはそれに *erotic* ですよ。ぼくは函館で料理やへつれて行かれた時に、年とった女の人がかきてね、江差追分をきいたんですよ。その三味線ね。録音機もって行けばよかったと思いましたが。

もう一つ、*「さみだれを集めて早し」*の最上川へ行った時……

服部 最上川のどこですか？ ぼくはあそこの人間ですから……

周郷 そこで、何でもなし素人の最上川舟唄っていうのをきかせてくれたんで

す。ひとつ驚いたことはね、息が長いんですよ。これは本当に、しずめるっていうのか、つまり両方の山にこだまするように歌うんです。舟にのって歌ってるわけじゃないのに……ほんとにしずめますね。

服部 そういうね、さっきから話題になっている、かきたてるとか、しずめるとか、人間の基本的な心みたいなものは、幼児にはそのまんま、ぼっちりわかっているんです。彼らはもちろんエロなんかわかりません。いかなれば *Homosex* ですよ。でもわかるんです。だからいいですよ。幼児っていうのは。

周郷 いつまで話してもきりがないけれど、このくらいにして、服部さんの作った音楽のレコードでもきかせてもらいましょう。なかなかおもしろかった。

(一九七四・五・一〇)

(3) 自分の気持ちを対象である小動物に託したようなことばで話す

。自分もそうだからかたつむりもそうであるという気持ちから、かたつむりに対するやさしい親しみの気持ちをことばで表現している。

(4) 考えたことやその考えを現実化したり、行動化しながら、そのことをありのままのことばで話す

。首をすっくめているかめの場合（前出）

。かめにえさを与えている時、幼児は自分とかめは同じだと感じて「水の中やないとのどがかわくにやわ」という話しことばでえさの与え方を話し、幼児が感じた通り、かめが水の中でえさを食べるのを見て、その喜びを「そうや、水の中やないとかかんにやで、水がないと泳げへんやんか」と自信をもった話しことばとして、いいあらわし、さらに音にかめが反応するのではないかという自分なりの考えを發展させ、ためしている。

。砂遊び場で山や川を作り、川を掘ったところにといをつないで水をうまく流そうとしているのであるが、水の流れ方、たまり具合などを見て考えついたことを、「こんなところにたまりよる」いくのはいくけどな、こんなところにたまりよ

る」などありのままのことばでいい表わし論理をすすめている。

対談について

二月号に非常にユニークな音楽教育論を執筆して下さった服部公一氏を読者の皆さまはご記憶と思います。対談の中にも出てくるようにワン・ジエネレーションの違いをもつお二人の対談はなかなか考えさせられるものがあります。

六月十日にご自身の作品発表会を控えていらっしやる服部さんのご希望で、赤坂の服部さんの事務所を拜借してこの対談をさせていただきました。ちょっとむしむしするような夜でしたが次から次へとお話はずみ、私どもが腰をあげたのは夜の十時半でした。

帰るみちみち、「あれほど自分をさらけ出す人も珍しい。今日はいい話だった」と周郷先生はおっしゃりながら、「終電に間に合わない大変だ」とタクシーに乗って行かれました。

服部公一氏略歴

一九三三年山形市に生まれる。山形東高校より学習院大学文学部に学ぶ。作曲を中田喜直氏に師事。六四年アメリカに留学し、ミシガン州立大学を中心に地域社会の音楽を研究。現在、作曲家、音楽評論家として活躍作品。ピアノ協奏曲・合唱曲集「朝の市場・童謡曲集」「おじさんの子守歌」ほか多数。